



2006年(平成18年)
9月号(No. 736)

社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club

定価1部 150円

URL ● <http://www.jac.or.jp>

e-mail ● jac-room@jac.or.jp

目次

日本山岳会と私の登山③

日本山岳会におけるヒマラヤ 登山連鎖の軌跡(2)……………	1
第9回「森の勉強会」 ボルネオ島の熱帯雨林……………	4
支部だより……………	6
山形/東九州 東西南北……………	8
図書交換会を17年ぶりに復活します/ 北大の山小屋展/来春、西太台入山 規制へ/「山村正光さんを偲ぶ会」 開催/橋本龍太郎氏の温顔を偲ぶ 橋本龍太郎さん 追悼……………	11
活動報告……………	12
自然保護委員会/山の自然学研究会 /三水会……………	14
図書紹介……………	16
新入会員……………	17
ルーム日誌……………	17
会員異動……………	17
図書受入報告……………	17
年次晩餐会名古屋開催について……………	17
さんけん通信……………	18
INFORMATION……………	19

▶ 日本山岳会事務(含図書室)取扱時間
月・火・木…………… 10~20時
水・金…………… 13~20時
第2、第4土曜日…………… 閉室
第1、第3、第5土曜日…………… 10~18時

日本山岳会におけるヒマラヤ 登山連鎖の軌跡(2)

重廣恒夫

70年代から80年代にかけて、日本山岳会は高い目標をかかげながら、ヒマラヤ登山を実践してきた。
各登山隊のリーダーとして、若い隊員を育ててきた重廣恒夫氏の2回目は、ナムチャバルワ初登頂からマカルー東稜までを綴ってもらった。

海外登山基金

日本・中国・ネパール三国友好登山隊による世界で初めてのチョモランマ交差縦走は、予定通り5月5日に成功した。一次隊の成功に続いて、さらに複数の縦走隊を送り出す準備をしていたが、登山の成功と首尾の完遂を要求される

中国指揮部の強い要望により、以後の登山活動を断念した。予定通りの交差縦走の成果にはある程度の満足感はあったが、余力を残しての登山終了は、この機会にできるだけ多くの登頂者を出しておきたいという思惑を打ち砕いた。しかし、世にもまれな巨大登山隊は、

その後の山岳会の新たな活動資源を生み出した。

三国友好登山隊が日本山岳会にもたらした資源は、若い会員たちと剰余金である。交差縦走は読売グループのバックアップのもとに行なわれた登山であったので費用の心配はなかったが、自前での募金の強化、国外費の為替差益、購入予定の登山装備のほとんどを寄贈によって賄うことができたことなどで、7000万円の剰余金を生み出した。それは今西壽雄総隊長、大塚博美副総隊長の配慮により、登山隊事務局、山岳会の財務担当との協議の結果、今後の海外登山の振興に有効活用するために、「海外登山基金」が、89年に創設(中国・日本・ネパール1988年チョモランマ/サガルマタ友好登山



1992年10月、未踏の最高峰ナムチャバルワに登頂

隊報告書・『山岳』第九十四年、1999年に詳述)された。

90年、92年、ナムチャバルワ

三国友好登山が成功裏に終わり、祝賀会がラサ、カトマンズ、北京、東京と順を追って行なわれた。ラサ空港を飛び立ったボーイング7

27は、チベットからネパールへ、ヒマラヤ山脈を眼下にしながらかトマンズへと向かった。峨々たる山並みを眺めながら、頭の中には次の目標が浮かびあがっていた。

80年、87年、そして88年と成都からラサを往復するたびに額をこすりつけて眺めた世界最高の未踏峰を登りたいという夢である。80

年のチョモランマ登山が成功した帰路、宮下秀樹副隊長はその「夢の山」への登山許可申請を北京で行なったが、いろいろい返事はなかった。しかし東京での交差縦走の祝賀会に來日した中国登山協会の幹部の感觸を確かめ、再び登山許可申請を提出した。そして90年8月、中華人民共和国国家体育運動委員会から、ナムチャバルワの特別登山許可を受け取った。

91年に登山を実施するためには、秋の偵察登山を行なう必要があった。神秘の山として守られてきた孤峰には、登頂を確実にするための情報之余にも少なかつたからである。偵察の同行は、当時若手の信望を集めていた早坂敬二郎氏と大西宏・佐藤正倫とした。84年のカンチェンジュンガ以降、山岳会の今後のヒマラヤ登山は山岳部

出身者が中心になると感じていたからである。91年の登山隊では高見和成氏に登攀隊長をお願いし、木本哲にも加わってもらった。ナムチャバルワ北西壁の岩壁帯は登攀のプロフェッショナルでないと通過できないのと、若い人達に登山技術の伝承をしたいとの思いがあったからである。

しかし、10月16日、並外れた体力でルート開拓の牽引役となっていた大西隊員を雪崩で失った。降雪直後の行動が事故の要因であったが、悔やんでも悔やみきれない事故であった。日本からご遺族にも参加してもらい葬儀・茶毘が現地で行なわれた。その後登山を再開したが、11月30日、すでに冬の様相を呈するナムチャバルワから撤退した。

12月7日、他の隊員よりひと足先に帰国した私は晩餐会場で登山の報告をし、ナムチャバルワ峰の再挑戦を訴えた。山岳会内においても再度の登山隊の派遣と私の登山隊長続行についての是非を巡っては多くの議論がなされたが、今回かぎりの許可を無駄にしないためにも次年度の登山隊には登山の絶対の成功と安全の確保という二

重の足枷で挑むことになった。

92年の日本側メンバーは、88年の友好登山隊のメンバーであった山本一夫氏を登攀隊長に、三谷統一郎、山本篤、佐藤正倫、青田浩が隊員となり、チベット側隊員と共に全員登頂をめざした。前年の失敗の要因に、激しく変化するナムチャバルワの天候予測が十分でなかったという反省があったので、カンチェンジュンガ登山隊で気象を担当した飯田肇の参加要請と気象ロボット、気象衛星の受像などの導入を行なった。しかし、正確な気象予測はできても荒れ狂う悪天を制御できない現実と闘いながら、10月30日には一次隊6人が未踏の頂に立ち、翌日、二次隊の5人も登頂した。

1940年、『ヒマラヤンジャーナル』12巻の巻頭を飾った一枚の写真に、世界の登山家がその登頂を渴望し、山岳会が10年以上も抱き続けた夢の実現と同時に、日中国交正常化20周年の記念に華を添えたのであった。

95年マカルー

80年5月10日、北京時間の午後9時、尾崎隆隊員と共に北壁から



上空から望むマカルー。頂上から右手の稜線が東稜

チョモランマの頂上に到達した時、夕日が西方の遙か彼方に沈む一瞬、巨大な塊となって横たわっていた眼前のマカルーが朱に染まった。その強烈な輝きは、帰路8600呎でビバークし、朦朧とした意識のなかでも鮮烈な印象として残った。

87年12月末、翌年に実施する交差縦走の偵察のためマカルー上空を飛んだ。広大なマカルー山塊にあって、カンシュン川から一気に頂上に延びる荒々しい東稜に目を



1995年5月、長大な東稜からマカルー登頂に成功

奪われた。そして92年、ナムチャバルワの日中合同登山隊が成功したタイミングを見計らって、マカルー東稜の登山許可申請を行なった。93年10月、中国登山協会から登山許可を受け取り、山岳会創立90周年の記念事業として実行に移されることになった。

この登山隊では世代交代を意識した。なぜならどんなに優れた組織でも同じメンバーでの運営が長く続くと、その全体能力は先細りして組織の疲弊に気がつかないことが多い。組織には常に新しい血を注いで新陳代謝をはからなければならぬのは常識であり、山岳会や登山隊も同様である。そのた

めには継続的に登山隊を組織する必要がある、組織運営を次代の会員に委ねることを考えて、登攀隊長は山本宗彦とした。「登頂」「成功」という二文字を獲得するためには、そのための隊員選考が必要であるが、山岳会の記念事業でもあったので会報を通じた公募と、各支部に会員派遣の要請を行なった。88年の交差縦走隊メンバー5名に、新たに山岳会に入会した田辺治は母校信州大学や日本ヒマラヤ協会、群馬岳連など多岐にわたったヒマラヤ登山隊に参加した歴戦の雄であり、松原尚之、谷川太郎らの若手に加え、当時まだ学生であった竹内洋岳、荒井俊彦など次代を担う構成で今回も全員登頂をめざした。

95年2月中旬、先発隊がネパールに入ったが、当地は未曾有の大雪で十分な偵察もできないまま本隊を迎えての登山活動となった。予想外の難路と悪天候のために苦闘の毎日であったが、モンsoonの到来を迎えたことと、隊員の疲弊も激しくなったので、5月18日にジャンクションピークに到達したのを機に頂上に到るルートを変更した。8月21日、田辺・山本篤・

松原・荒井の4名が、翌22日、山本宗彦登攀隊長・小野岳・谷川・竹内の4名がプラトより登頂し、25日に全員無事にベースキャンプに帰着して登山は終わった。ベースキャンプを去る前夜、「マカルー登頂は大きな感動であっても、ほんのわずかな体験でしかないことを自覚し、更なる研鑽をして、新たな目標に向かって前進してほしい」と結んだ。

これからのヒマラヤ登山

日本山岳会は1976年から1995年までの20年間で、22隊の登山隊・偵察隊に205人の会員、30人の学生部隊員、20人の非会員を派遣している。その後、山岳会での経験を糧として、多くのヒマラヤ登山に邁進して大きな成果をあげたことは、青年部による96年のK2南南東リブからの大量登頂、97年のダウラギリI峰、98年のカレンチェンジュンガ北面からの登頂などで明らかである。それは、ヒマラヤ登山の回数を重ねた隊員（2回以上の参加は43名）たちが、その後母校の目標達成の原動力となったことで物語っているし、マカルー東稜が初めてのヒマラヤ登

山であった竹内洋岳の、その後の活躍をみても明らかである。これは50年前のマナスル登頂を嚆矢とする山岳会におけるヒマラヤ登山の連鎖の成果であったと信じて疑わない。

しかしその後、組織の継続を念頭においた事業は減少し、ヒマラヤ登山の連鎖も途切れてしまった。少子高齢化による若年者の減少だけではなく、体育系のクラブ自体が衰退している社会現象下ではない方ないことも知れないが、山岳会においては高所登山研究委員会がなくなったことも途絶の大きな要因ではないだろうか。未知、未踏、バリエーションという言葉が死語になりつつある現在ではあるが、山岳会という組織の存続を考えた時、山岳会の目指すべき理想を再確認し、それを実現するための概念を構築し、具現化する筋道を描くことが必要であり、そのため再びヒマラヤ登山の第一歩を踏み出す時期に来ているのではないだろうか。一枚の地図から始まるヒマラヤ登山、100年を過ぎた日本山岳会に求められているのは、ゆるぎなき情熱と温故知新からの一歩前進である。

第9回「森の勉強会」 ボルネオ島の熱帯雨林

東海支部 橋村一豊

私の発案で始まったこの学習会の目的は、山岳会会員の森林力養成による自然保護のレベルアップである。森林の生態を知らずに、正しい自然保護はできない。

1999年以来、^{あしゅう}芦生原生林(4回)、白山千振尾根、伊勢神宮宮域林(2回)、その他などをフィールドにしてきた。

最近の森林生態学の先端テーマは「生物多様性」、「共生」、「共進化」、「地域生態文化」である。その学習のフィールドは、熱帯雨林が最適であること、および熱帯雨林は伐採により消滅に向かいつつあり(石弘之「世界の森林破壊を追う」朝日新聞社刊)、遅れぬうちに見ておきたいという切迫感が加わり、今回の実施となった。

第8回「森の勉強会」(神宮の森)で主任講師をしてもらった中静^{なかしずか}透先生(当時、総合地球環境学研究所教授、現・東北大学教授)の導きと、2日間にわたる現地指導によって、この勉強会が実現でき

た。厚くお礼申しあげたい。なお参加者は9名(東海支部6、首都圏2、関西支部1)で、期間は6月6日〜13日であった。

目的地

世界で最も樹木の多様性が高い、ランビルヒルズ国立公園内の京都大学研究林(Lambir Hills National Park Miri, Sarawak, Malaysia)。「種子散布者として重要な昼行性霊長類(サル)を失ったランビルの森は、たとえ現在はまだ樹木の高い多様性を示していても、それは遺存(レリック)にすぎず、その多様性をつくり出し、維持してきた力はもはや働いていない」(湯本貴和「熱帯雨林」岩波新書)

ここを研究拠点として日本各地の大学から院生、研究者や教官が来て、常時20人くらい活動している。この森の開拓者で、世界に誇れる逸材の故・井上民二京大生態学研究センター教授は、ブルネイからミリへ向かう航空機の墜落事

ランビルヒルズの森・所在地



故で早逝されたが、その夫人・栄子さんが二棟の立派な研究所を寄付され、私たちもここで入林の用意をしたり、休んだりさせていだいた。

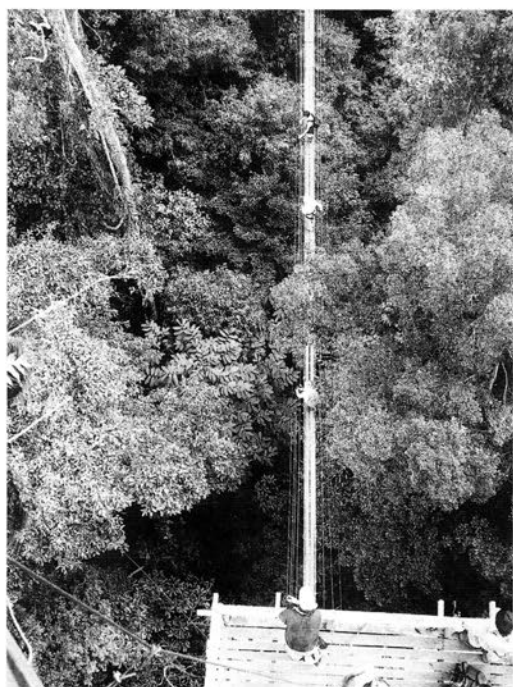
森への行き方

マレーシアの国土は、マレー半島南部と、南シナ海をへだてたボルネオ島北部とに分かれる。ランビルヒルズの森は後者にある。コタ・キナバル空港へは関空と成田

から直行便(約6時間)があり、そこでローカルフライトに乗り継ぎ、1時間でミリへ着く。ミリはホテルがたくさんある大きな町で、森へは50分のドライブ。

生物多様性

識別された生物種は、カール・フォン・リンネ以来350年たつが、わずか141万種。未識別種はおよそ5千万種と推定され(ウイルソン、1992年)、識別率は



林冠歩道（キャノピーウェー）を先導する中静教授

わずか2・8割にすぎない。14万種の50〜80割が熱帯雨林にいる。熱帯雨林とは、まさに生物多様性の宝庫である。

ランビルヒルズの研究林にある52ヘクタールの調査プロットでは、大阪市立大学の山倉拓夫博士が率いるチームが胸高直径1メートル以上の木本33万本にタグをつけ、計測調査するという気の遠くなるような作業を完遂し、1200種以上の樹木を同定した。稚内から西表島まで、日本全土の分布樹種が10000だから、ランビルヒルズの種数がいかに多いかがわかる。この数値は世界記録である。

共生

動物との共生関係なしには、植物の生存と繁殖はありえない。共生は普遍的であり、相利共生（ミューチュアリズム）が生物多様性を維持する根幹である。相利共生は次の4つからなる。

- ① 栄養共生（菌根菌のはたらき）
- ② 送粉共生（昆虫、鳥、獣などのポリネータ）
- ③ 散実共生（ジャンセンIIコーネル仮説、大型動物による種散布）
- ④ 防衛共生（アリによる被食防衛）

詳細は略すが、今回はランビルヒルズの森で防衛共生（アリとオ

オバギ）の実例を詳しく観察することができた。

共進化

ダーウィンの進化論とは別の原理としての進化を促す力。相利共生により発現し、ダーウィン原理より進化圧が強い（故・井上博士の所説）。

林冠生物学

温帯林は三層からなるが、ランビルヒルズの森は五層からなる。林床から30メートル以上の高さに生物活動がある。30メートルから70メートルの林冠（キャノピー）を観察することが必要で、そのための巨大クレーン、梯子、空中回廊などを利用。視界がよく、登るとさわやかで気持ちがいい。

地域生態文化

故・中尾佐助会員が提唱された「照葉樹林文化論」の発想。栽培植物と林産物により食生活を営む地域文化を再考する。これなしでは21世紀の持続的森林利用が先細る。中静先生が段取りし、同行してくれた山棲みの民、イバン族の集合住宅（ロングハウス、長屋）訪問

と、長老や住人との対話は有意義であった。麴を用いてインディカ米から作られた、酸味の快い酒は、洗練された味でとてもうまかった。森林の樹木を識別するとき、この人達の助けに頼ることが多いと、中静先生は言っておられた。

その他

サバ州の世界遺産洞窟見学、観光用の空中回廊、コタ・キナバル市内観光などに3日を費やしたが、さしたる知的刺激を受けるものもなく、省略する。次回からはこの日程は切り捨てたい。

これから

ランビルヒルズのフィールドスタデイ、原住民訪問は再催行したいと考えている。



支部

だより



全国各地の支部から、
それぞれの活動状況を、
北から南へとレポート
します。

山形支部

初夏の帝釈山と田代山

6月24・25日、7月の支部山行を行なった。1週間前に山開きが行なわれたばかりの帝釈山、田代山への1泊2日の山行である。

24日10時に酒田、鶴岡より参加の2名と山形市内の4名が合流し、まずは今夜の宿、湯ノ花温泉へと向かう。途中、喜多方では旅人気分蔵の街を散策し、名物のラーメンを賞味する。湯ノ花温泉の民宿「かじや」には16時頃到着。さっそく温泉を楽しみ、夕食時には明日の天気を祈って、まずは乾杯する。

25日、晴れ。6時出発。福島、栃木両県境にまたがる林道を、猿蔵登山口へと車を走らせる。駐車場はすでに混みあっていた。ひんやりとした朝の空気に、足元も軽やかにはこぶ。日の差し込む沢道

では、ひとときわ紫色の花が映える。ラシヨウモンカズラだろうか。

コメツガや、ブナなどの樹林帯を急登すると、大きく開けた青空が目の前に現われ、小田代湿原に出た。青空の下、湿原に咲くヒメシヤクナゲは淡紅色の小さな壺型の花を枝先につけ、タテヤマリンドウは淡い青紫色に陽が当たり、輝いていた。

さらに進み、急な登りにさしかかる。登りきって広大な見晴らしの田代山山頂に着いた。山頂には、池塘をぐるりと巡る木道がつけられている。可憐な花々が一面に咲き競う木道を散策し、大満足、気分は最高だ。

帝釈山へと進む頃、少しずつ雲の動きが気になってきた。弘法太子堂の避難小屋から先、針葉樹林帯の中にはまだ残雪があった。その傍らにはオサバクサの白い花が一面に群生し、私達を喜ばせてく



ガスのかかった帝釈山山頂にて

れた。絶滅危惧種との出合いは、なによりの収穫である。

帝釈山山頂では視界が悪く、360の展望には出合えず残念。次回に期待しよう。

頭の中で山頂からの展望、山座同定を描いてみる。北は笠倉山からはじまって北東の安達太良山、東は明神山、南東の筑波山、南西の浅間山、西の巻機山、北西の会津駒ヶ岳など……。

木道を行きかう人々の傍らに咲く可憐な花々、初めて遭遇した冬眠鼠（ヤマネ）の姿など、まさに山頂の楽園での実に楽しい山行であった。

(長岡昭雄)

アルパイン・フォト・ビデオ・クラブ山形展開催

アルパインフォト・ビデオ・クラブ（JAPVC）の山岳写真展「心に映る山々」山形展を、7月21日から27日まで、酒田市総合文化センターのモールで開催した。

写真展示は、川嶋新太郎 JAPVC 副代表の指揮のもと、地元会員の協力を得て行なった。

会場は、ホールや図書館などを併設するコミュニティセンターで、市民と利用者の通路になっている。

宣伝は、山形支部が支部会員に郵送した写真展開催案内と、口コミ、写真展パンフレットを馴染みの写真店に置いてもらっただけであったが、初日から山や写真の愛好者が見に来てくれた。

2日目は、NHK山形の記者が取材に訪れ、地元会員の志田郁夫さんの作品「鳥海登行」や、羽田栄治 JAPVC 代表の作品「岩塊・サス・ボルドイ」と会場風景を撮影、当日のローカルニュースで2回放映された。

当地での展示会は3回目となり、日本山岳会と JAPVC の存在が市民の間に知られてはきたが、翌日からは、テレビを見て来場した



約2000人の来場者があり、好評であった写真展の会場

人が多くなった。さすがNHK、ニュースでの放映効果には絶大なものがあると感じた。

期間中、約2000人近くの来場者があり、山岳写真を鑑賞した。人口10万人余の地方都市で、2割もの人が来場してくれたということは画期的な出来事である。文化センターの職員も「今回は、作品も良いし観客も多かった」と嬉しいことを言ってくれた。

会場での感想は「やっぱり山の写真はいいの」「山の写真は機材を背負って登らねば撮れないから大変だのー」などであった。

(菅原恒男)

東九州支部

中央分水嶺踏査を終えて

大分県内における中央分水嶺の踏査は、さまざまな面で当支部を活性化させてくれるとともに、「ふるさと山」について、登山者の目から見た問題点をクローズアップさせてくれた。

活性化の要因は、踏査の立案段階から実施までの間に、支部会員と会友のほぼ全員が何らかの形で参加したこと。これによって親睦・相互理解も含めて、組織と行動の面で結束が強まったことが第一である。

日本山岳会の創立100周年の時点で、東九州支部は45周年であり、間もなく50周年の大きな節目を迎えることになる。そのための準備ということだけに留まらず、活性化は今後にきつと良い結果をもたらしてくれるはずだ。また、踏査が報道されることによって、日本山岳会そのものの知名度をアップさせたことも見逃せない。

「ふるさと山」が抱えた問題点はいろいろあった。踏査は行程のほとんどが藪こぎだった。つまり、ごく一部を除いて未踏に近いもの



久住山頂にて

だった。会員たちは、最近経験することのないパイオニアワークめいたものを体験し、心を躍らせたものである。

反面、その中で、山地が予想以上に荒れていることを知った。植生がクライマックスに達している自然林は良いとしても、人工林の部分が手入れもされないままに荒廃しているのだ。近年の林業の不振や後継者不足で間伐もままならずに衰えていることに加え、先年の強い台風によって倒された木々が、始末もされないまま放置されている地域も多かった。

さらに、里山を含めて「忘れられている山」が目立った。かつて

は登山者やハイカーの訪れもあった山が、最近は見向きもされなくなり、登山道が完全に荒れているところが多かった。一方で、有名な山には登山者が集中し、登山という行為自体が自然破壊を引き起こしているという状況を目の当たりにした。特定の山への過度の集中と、その逆の無視との間で、登山の対象となるべき山の姿が両極端へと進んでいる。

根底には、いわゆる百名山ブームもある。当支部が選定してガイドブックを出版した『大分百名山』にも責任があるだろう。百名山には訪れる人も多く、ルートもそれなりに整備されているが、選定にもれた山が「忘れられた山」になっている。特に最近の中高年登山ブームに加えて、「山は連れて行ってもらうもの」との風潮も要因ではないだろうか。自主的な登山計画をたてることなく、リーダーの指導の下でベルトコンベア式の登山をする人たちが増えている現実がある。

未踏の尾根を歩き、かつての登山を思い起こす機会ともなった分水嶺踏査のなかで考えたものであ

(梅本秀徳)

東 西 南 北

N

S

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。（紙面に限りがありますので、1点につき1000字程度をお願いします）

図書交換会を17年ぶりに復活します

図書委員会

「図書交換会」は松方三郎名誉会員の発案で、1968年に「山岳図書交換即売会」として第1回が開かれ、その後89年まで毎年、図書委員会が開催していたものです。「交換会」と銘打っていますが、会員から不要になった山岳図書をつのり、入手を希望する他の会員に図書委員会が取り次ぐというものです。

かつての図書交換会は、交換会当日の出席を前提としていましたが、今回は、主な出品図書リストを会報に掲載し、郵便での入手申し込みも受け付けることにしました。そのため、地方在住会員も幅広く参加できます。

つきましては、山岳図書を他の会員に譲ってもよいという方がいらっしやいましたら、図書委員会までお送りください。

●10月末日までに、出品図書をお送りください。雑誌類は原則としてお断わりいたします（なお、詳細は19頁「information」参照）。

●頒布価格は図書委員会に一任ください。特に希望価格がある場合はご連絡ください。

●頒布が成立した場合は、80円を出品者に、20円はJACおよび図書委員会の手数料とし、郵送費その他に充当させていただきます。

●頒布が成立しなかった図書は、送料受取人払いで出品者に返送させていただきます。返送を希望されない場合は、処分は図書委員会に一任ください。

●入手希望者が複数の場合は、抽

選を行ないます。

なお、図書交換会は、07年3月にルームで開催予定（日時は未定）。出品図書リスト・頒布価格は、会報「山」2月号およびホームページに掲載予定です。詳しい入手方法などについても、その都度、会報「山」でお知らせします。

伝統ある行事を復活させることで、山岳図書にいつそう興味を持っていたかどうかというのが趣旨です。多くの会員の参加を期待しています。

北大の山小屋展

大森久雄

7月中旬、北海道の山に行ったり、札幌で北大の総合博物館をのぞいてみた。以前訪れた時は時間不足でだいぶはしょったのでこんどはゆっくりと見て回った。北大の沿革と学術・研究活動を紹介しており、北海道のほか地球の3極（北極・南極・ヒマラヤ）を対象とする種々の研究・調査などが豊富な資料で解説されていて興味深かった。

建学130年ということで、そのほかに企画展示として「北海道大学の山小屋展」も同時開催されていた。北大所属の山小屋としては「ヘルベチア・ヒュッテ」が有名だが、その他に同じく手稲山にある「パラダイス・ヒュッテ」と、「奥手稲山の家」、また「空沼小屋」、「無意根小屋」と、今は合計5つの山小屋を持っている。「奥手稲山の家」「空沼小屋」「無意根小屋」の3つも北大所有とは知らなかった。

1920年代の末、北大のドイツ語教師グラブラーやスイス人のハンス・コーラー、マックス・ヒンデルなど、山とスキーを愛好する人たちが、ドイツ留学から帰った山崎春雄などが、スイスの山小屋（ヒュッテン）生活（レーベン）を再現しようとして建設したのが最初だという。これもまたなかなか楽しい展示で、思わぬ儲けものであった。B5判84頁の立派な解説冊子（定価700円）もできているので、興味のある方はそちらで詳細を見てみてはいかがだろうか。展示は9月3日までであった。

北大は5つもの山小屋を札幌から至近の場所に保有している。授



北大の、手稲パラダイス・ヒュッテ

業や勤めを終えてからでも利用できる場所に持っているとは贅沢で、うらやましいことだ。

翌日、「パラダイス・ヒュッテ」を訪れて風趣のあるそのたたずまいを外から眺め、北尾根を歩いて下った。

そのほか、北大構内の一隅に山岳館があるというので、探してたずねてみた。正門から構内見物しながら歩いておよそ40分という「僻遠の地」にあるのを探しあてたが、鍵がかかっていた。山小屋風のいい感じの造りで、北大山の会所属ということだ。見学にはOBの紹介か、事務に事前の申し込みが必要なのである。

来春、西大台入山規制へ

田村義彦

自然公園法は「保護」と「利用」の両立し難い目的を掲げてきたが、環境省は2002年に、特別保護地区に僅かに残されている原生的自然を保全し、質の高い自然体験を持続するために「利用調整地区」を新設する画期的な法改正を行なった。「保護」と「利用」の両立を図った苦肉の策といえる。当初は知床と小笠原を予定していたようだが、地元の意向で頓挫した。

一方、環境省は05年に策定した「大台ヶ原自然再生推進計画」の中に、西大台を利用調整地区に指定することを盛り込んだ。自然再生推進計画評価委員会利用対策部会で議論を重ね、本年(06)2月に利用適正化計画検討協議会が設置された。専門委員・関係行政機関・関係公共交通機関・地域住民・山岳団体・自然保護団体・応募NPOなど30数名で構成され、日本山岳会も委員を委嘱された。

計画の基本理念と区域については直ちに合意が得られたが、規制



利用調整地区に指定予定の西大合の森林

人数については総量規制かピークカットかで難航した。判断の根拠としては、05年の統計数値しかないので、厳密な科学的論議は不可能であった。環境省は総量規制を退け、ピークカットの基準を次のように決めた。「1日あたりの総利用者数の上限」として、●繁忙期の土日祝日1100人、●繁忙期の平日、繁忙期以外の土日祝日1150人、●繁忙期以外の平日1130人とした。また「1団体あたりの人数の上限」を10人とした。

「1日あたりの上限」は多過ぎるが、環境省はこの基準を、「理想を掲げつつ現実的な数値を行政判断した」として、今後、毎年モニタ

リングの評価を計画に反映させ、下方修正の可能性を認めた。今後に期待するしかない。

計画案は協議会の合意を得た。今後、9月のパブリックコメントを経て、11月の中央審議会に諮られる。承認されれば明春1月に利用調整地区の告示、3月に利用適正化計画の公表を経て、4月から管理が開始される。日本で初めての利用調整地区となる。

一方、環境省に代わって実務を行なう指定認定機関に地元上北山村が手を挙げているが、国の財政措置が望めない状況で難航が予想

エベレスト街道の高品質のロッジに泊まる
シャンボチエ・パノラマ・ホテルにも2連泊

エベレスト展望ロッジ滞在ゆったりトレッキング12日間

●出発日(旅行代金)

①10/22(¥398,000) ④11/11(¥398,000)

②10/28(¥398,000) ⑤12/22(¥398,000)

③11/4(¥398,000) —お申込みはお早目に—

アルパイン ツアー サービス 株式会社

〒105-0003 東京都港区西新橋1-12-1 西新橋1森ビル2F ☎03-3503-1911

大阪 ☎06-6444-3033 名古屋 ☎052-581-3211 福岡 ☎092-715-1557

e-mail: info@alpine-tour.com http://www.alpine-tour.com

される。もし責任ある引受け手が無い場合、この制度は瓦解する。理想を追う政策だけに、国の英断を望む。

入山手続きは郵便かネットで申込み、手数料1人10000円を納入すると先着順で決められて立入認定証が送られてくる。それを大台ヶ原ビジターセンターに持参して、本人確認のうえレクチャーを受け、入山することになる。

「山村正光さんを偲ぶ会」開催

三好まき子

6月24日、山梨県甲斐大泉の「ロジ山旅」で、昨年末に亡くなった山村正光さんを偲ぶ会が開かれた。

世話人をつとめる大森久雄・横山厚夫・松沢節夫の各氏をはじめとして、夫人の山村秀子さん、令嬢の聖さんもまじえて、総勢19名が集まったロジはほとんど満杯。参加者の中には、片岡博・藤本一美・古屋学而・神長幹雄の4氏の顔ぶれも見え、片岡さんが語る「山ちゃんね……」という言葉に、

交流の長さや深さを感じられた。

「ロジ山旅」は、山村さんとなじみの深い宿でもあり、山村さんの思い出話を肴に、お酒とおしゃべりがはずむ楽しい一夜となった。「お酒とにぎやかなことが大好きな山村さんだから、自分がここにいないのを残念がっているだろうね」と大笑いする一幕もあり、時間がたつのがもったいないような夜だった。

橋本龍太郎氏の温顔を偲ぶ

三ツ石 清

愛知の万博の開催にあたり、表裏ともに尽力された橋本龍太郎氏が逝去された。東海支部の最高顧問であり、支部の数々のヒマラヤ遠征の時には、親しくネパール奥地まで遠征隊のベースキャンプ慰問に行かれた。68歳の若さでの逝去には痛恨の極みである。

先生が蔵相のころ、山岳会の晩餐会が高輪プリンスホテルであり、70歳そこそこであった私も参会した。私はその頃、環境庁自然保護局嘱託として、自然公園指導員の

森林はモリやハヤシではない

四手井綱英著／四六判／288頁／定価2100円
里山の名付け親・九五歳を過ぎた森林生態学者の魂の語り。

大峯奥駈道七十五靡^{なびき}

森沢義信著／A5判／312頁／2940円
吉野から熊野へ究極の山岳修験の山道と行場を克明に紹介。

旗振り山

柴田昭彦著／A5判／288頁／3000円
旗山、高旗山、相場振(そばふり)山、相場山などの研究と案内。

富山湾岸からの北アルプス

佐伯邦夫著／四六判／268頁／1995円
立山、黒部、剱、白馬、毛勝など北面からの新鮮な登山紀行。

日本全国4000山の情報を網羅!

新日本山岳誌

日本山岳会・責任編集 日本山岳会創立百周年記念出版
菊判(192頁) 上製/クロス装/カバー掛け/函入り 18,900円

〒606-8161京都市東山区南町15 **ナカニシヤ出版** TEL.075-723-0111
FAX.075-723-0095
<http://www.nakanishiya.co.jp/> [表示価格は税込]

腕章を付けて、全国の国立公園のパトロールに精励していた。晩餐会には皇太子さまも会員として参会されており、壇上で行なわれている行事を見上げておられた。

会食も終わり、さて自由談話の時間になった。私が橋本氏に「大臣、知っておりますか」と緑の腕章を見せると、「ああ、よく知っていますよ、上高地で見かけるよ」「貴下のような高官がこんなことを知っているとは、偉い」嘱託が無給であるので、いくらでも手当をつけてほしいと思い、この機会にと、話しかけた。そこへドヤドヤと女

子会員が私たちをとりまき、カメラのパチパチがはじまった。勿論ドヤドヤ、ガヤガヤの元は、若い大臣(橋本氏)の人気によるものである。

以後、あの晩の印象、橋本氏の温顔は大切な思い出のひとつである。

現在、私は93歳で車椅子人間である。老人保健施設で、山岳書や文学書の耽読の毎日をおくっている。時々、山行の夢を見る。あの頃は、本部主催の親睦山行に東海支部から毎回参加したものだ、懐かしく回想している。

橋本龍太郎さん 追悼



2006年7月1日没
享年68

橋本龍太郎先生

湯浅道男

私は「誰もが自分だけで大切にしているものがある。日を追って大きくふくらんでいく、珠玉のような想い出、それは橋本龍太郎先生とのアジアの山旅である」との書き出しで、ある新聞に載せたエッセイがある。1973年、RCC II 同人を中心に構成された登山隊が、エヴェレストの秋季初登頂に成功した。そのときの総隊長が橋本龍太郎先生。それ以降、ネパールへ行くときは必ず私を誘ってくれた。先生は「だって、ネパールという国を紹介してくれたのは君だろう」といって、独特のいたずら小僧のような笑みと瞳で応えてくれた。実は、その後のネパ

ル通いの目的は、ネパールの医療施設の整備のためであった。

三国合同登山隊のときは、中国政府の要請による会談のため北京で時間をとりすぎ、やつとの思いで北側BCを、その後南側(ネパール)BCをそれぞれ激励訪問、軍用ヘリで一気にBCへ到着した。BCは5400メートルを超える高さ。それでも、悪名高いアイスフォールを登る、という意気込みを示された。そんなとき、厚生省から先生帰国のための職員を派遣した、という情報が入り、直ちに下山をする決意をしていただいた。ところが、ヘリが故障。やむなく、正午、BCから歩行で下山開始、実に十二時間かけてベリチエへ到着した。人業ではない、責任感のみ。

飛行機待ちのカトマンズ滞在中、病院を視察された。国立の大病院ですら、ベッドも満足になく、多くの子供たちが床に寝かされた姿を見て涙された。帰国後、直ちに病院整備の検討を指示されたのであろう。その後のネパール行きは、その成果のさり気ない状況視察といつてよい。奥様も誘って、橋本先生という方はそういうお人であった。

若き日の龍太郎さん

近藤隆治

麻布中高校時代の橋本龍太郎さんは大変やんちゃな青年でした。父、橋本龍伍さんが厚生大臣を辞めて暇ができた時、母・正さんと高校生だった龍太郎さんを連れて、燕から槍、キレットを越えて穂高への縦走をしたことがあります。なんと足の不自由だった父、龍伍さんは義足に松葉杖での山行だったのです。その時を知る、槍ヶ岳山荘の穂高貞雄さんは、父親やガイドの姿を見て、山が好きになったのだとは言います。

その頃、私のいた山岳部を羨ましそうに出入りしていました。彼は、校舎の屋上で飯盒炊きをし、は、校舎の屋上で飯盒炊きをし、ザイルでの懸垂下降の練習中、大時計を狂わせ針の部分に自分の名前を書き込んで証拠を残し、先生に大目玉をくったものでした。

彼は早くからヒマラヤを夢見ていましたが、親友が穂高で遭難してから暫く山に行かず、慶応で剣道に熱中していました。その後、議員になったのち、私の山岳映画の仲間で、日本の一流クライマー

の集団、第二次RCCの奥山章氏から誰かクラブの会長に相応しい人を紹介してほしいという相談があったので、龍太郎さんを紹介したのがヒマラヤへの夢に繋がったのでした。

36歳でエヴェレスト南壁へ挑戦、国会の合間を縫って行ったが、南壁は失敗。1984年、日本山岳会創立80周年記念カンチエンジュンガ、88年5月5日にはエヴェレスト三国合同隊の総隊長を務め成功、そしてネパール、中国との関係にも一役買うことになりました。龍太郎さんが、日本山岳会の恒例の晩餐会では皇太子殿下と席を共にし、「殿下はお酒が強いからいつも負けてしまうよ」と嬉しそうに語る顔が今でも浮かびます。国会をはじめどこに行くにしても、常に上級登攀ガイド認定証と日本山岳会の会員証を必ず持ち歩き、誇らしげに見せていたものです。

橋本龍太郎 はしもとりのゆうたろう

元衆議院議員で、96年から2年半総理大臣を歴任。中学時代から登山を始め、いくつもの日本山岳会登山隊で総隊長を務める。日本山岳ガイド協会会長。山岳には79年10月入会。

活動報告

日本山岳会の
各委員会、同好会の
活動報告です

自然保護委員会

自然エネルギーシンポジウム

6月25日、伊那市役所ホールで「自然エネルギーと私たちの未来——伊那谷の環境にふさわしい新エネルギーを探る」と題するシンポジウムを開催した。本シンポジウムは、入笠山周辺に計画されている大規模な風力発電基地の建設に関連して、地元山岳団体など14団体が主催し、日本山岳会自然保護委員会ならびに信濃支部が、伊那市、日本自然保護協会、日本野鳥の会、WWFジャパンと並んで後援参加し、(財)自然保護基金が協賛して開催されたものである。

当日は、森武昭会員(神奈川工科大学教授)が「自然エネルギーの現状と課題」と題して基調講演を行ない、菊地敏朗さん(山岳ジャーナリスト)がパネルディスカッションのコーディネーターを務

められた。当会からの参加者も、東京や信濃支部から20数名にのぼり、会場を埋めた220名の人たちと共に、4時間にわたり熱心に議論に聴き入った。

風力発電は、太陽光発電と並んで、地球温暖化ガスが発生せず、しかも資源的に枯渇の心配のない新エネルギーとして期待され、国策として開発が進められてきている。今までは、日本各地の海岸や草原を中心に設置が進められてきたが、近年は、装置の大型化と施設の大規模化が進み、立地も海岸線や草原だけでなく山岳地帯にまで広がってきている。

入笠山周辺で計画されている二つの計画は、日本で最初の山岳地帯での本格的商用発電計画で、風車一基の高さが1000^{メートル}、発電能力が毎時10000^{キロワット}、1670^{キロワット}級のもので、それぞれ約30基とい



シンポジウム会場の前で

う大規模なもの。この建設のためには、基礎工事、取り付け道路の建設を含む大規模な山岳環境の改変が予想される。当然、景観への影響は避けられないし、猛禽類などの衝突事故も懸念されている。

従来、風力発電といえは、クリーンで枯渇の心配のないエコエネルギーというプラスイメージだけが先行していた。しかし、その建設に伴って山岳環境を著しく壊す恐れがあるならば、見過ごすわけにはいかないというのが、自然保護委員会としての立場である。

今回のシンポジウムは、自然エネルギー全般について、その特質、長所と問題点、世界と日本の現状

などについて理解を深めることができ、入笠山の計画のあり方についても、良い判断材料が提供できたと思う。(山川陽二)

山の自然学研究会

カムチャツカフラワーハイキング

このフラワーハイキングは、高山植物が南北に長い日本列島とカムチャツカ半島でどう分布が異なるか、東西に山脈が延びるスイスアルプス、同じロシアのコーカサスやヒマラヤのその分布種類とどう違うか、この目で観察するために計画されたものである。

7月13日、やま学研17名は新潟に集合、空路ウラジオストクへ。2日目、ロシア国内航空でカムチャツカの州都ペトロパブロフスクへ。3日目、六輪駆動車でデコボコ道を揺られアバチャ山麓BCへ向かう。午後はラクダ山(1465^{メートル})ヘトレーニング、さっそく多種の高山植物に出会えた。

4日目はアバチャ山(2741^{メートル})登頂の予定であったが、天候が良くないのと、前日の降雪で凍りつく雪面をみて登頂を断念した。そして、2000^{メートル}の展望台から



パチカゼツ高原のお花畑で (写真=西田 進)

アバチャ山・コリヤーク山(3456^{メートル})の展望を楽しむ。帰途、カムチャツスキービーチ原野の高山植物を見学。網走の清水水原生花園を10倍ほど雄大にしたような所で、海拔0^{メートル}での高山植物の観察ができる。

5日目、六輪駆動車でパチカゼツ高原へ。北海道の知床連山・知床五湖に似た風景の高山植物帯の中を歩く。昭和30年代の北アルプスを思い出す。白色の○○イチゲ、黄色の○○キンバイ、赤色の○○コザクラと言ったとおり、○○にハクサン(またはハクバ)、エゾと入れた親類の高山植物が繁茂しているではないか。尾瀬に生えるヒ

メシヤクナゲやモウセンゴケにも出合う。地衣植物の種の多いことまさにこれを見に来たのだ。

6日目、六輪駆動車で露天温泉のロドニコヴァヤBCに向かう。

道なき道を進み、高山植物群落、雪原の上でも進み、やっと着いた露天風呂で水泳に興じ、カムチャツカの山奥深い高原を楽しむ。7日目、ペトロパブロフスクへ戻った。最終日20日、ウラジオストク経由で新潟空港に帰る。

カムチャツカは半島全部が世界遺産に指定された多数の火山で成り立ち、地形的には日本列島に似ている。高山植物帯でも同じ東アジア植物帯に属する類似の自然が味わえ、環境破壊の無い時代の日本にタイム・スリップしたようだった。さらに、エリゾヴォ市郊外で立ち寄ったファーマーズハウスでは、山菜料理や燻製鮭に舌つづみをうち、ウォッカに酔いしびれ、ロシア音楽と哀愁をおびた歌声を聞き、極東ロシアの最果ての民族文化に触れた。

南北に長い日本列島とカムチャツカ半島に、氷河期と間氷河期の寒暖差を生きたびた高山植物をはじめ各種の落葉樹林など、世界的

にも類を見ない多種の植物群を観察することができた。『日本の山はなぜ美しい―山の自然学への招待』(小泉武栄著)を確認できた有意義な山旅であった。(船橋明)

三水会

第9回・韓国シリーズ

徳裕山、馬耳山、逍遙山

5月21日、仁川空港に参加者17名が集合。

22日、九千洞より徳裕山に向けて登山開始。白連寺まで6^{キロ}の道は舗装しており、両側にシロサツキやゴヨウツツジが咲いている。清流洞を過ぎるとカエデや松が増えてくる。親岱橋の先に養魚場があり、エゴノキの白い花があちこちに見えだす。琴浦灘に着くとオオヤマレンゲが目立ってきた。九千瀑布、四天王像を過ぎると白連寺の山門がある。立派な伽藍である。ここからはかなりの急勾配が続く。岩道に入ったとたん雨が降り始める。

12時17分、標高1614^{メートル}の徳裕山頂上に着く。寒いせいかチョルチュクは咲いていない。別行動の4名は、茂朱スキー場を10時始

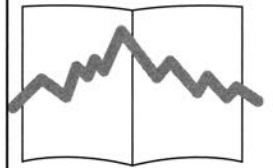
発のゴンドラを利用し、ソルチョン峯に登った。徳裕山の北の稜線上にあり、山頂まで30分の木道があるが、時間が早すぎ本隊とは会えなかった。雨が降り、風も強い。ゴンドラの運行がストップされることを懸念し、早々に下山した。

本隊は、頂上を13時出発。草原の下りは長く、17時30分、安城面に下山し、バスで全州に向かう。

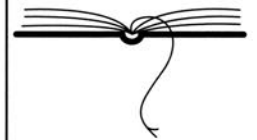
23日、豆腐料理の店で朝食後、南面から馬耳山に向かう。金色で装飾された金塘寺を経て、塔寺へ。ここの大雄殿には全国から集められた石が積んである。隠寿寺を経て、女岳と男岳の鞍部に階段登高する。女岳は2年前から10年間登山禁止となっている。男岳は以前から禁止である。同じ階段を戻り、北面の駐車場からソウルに向かい、明洞のホテルに宿泊する。

24日、水蹄駅から市内バスの逍遙山行きに乗車する(所要1時間30分)。広い駐車場から逍遙山まで意外に時間がかかり、夕食の打ち上げになんとか間にあった。

25日、仁川空港より帰国した。来年は10回目となる。雪岳山の溪谷を再び登り、有終の美とした。(石田稔郎)



図書紹介



四手井綱英・著

『森林はモリやハヤシではない
私の森林論』



2006年6月 出版刊
ナカニシヤ 277頁
四六判 定価 2100円

本書を読み進むうちに、この題名の中に著者の森林に対する深い思いとメッセージがこめられていると感じるのは、私だけではないと思う。著者によれば、森林という言葉の本来の意味は、日本でいうモリとかハヤシを表わす総合語ではなく、深林すなわち「深い林」のことであって、自然の奥山の森を表わすことばだという。

著者は、今年95歳になる。1936年、京都大学農学部林学科を卒業して山林局（現在の林野庁）

に入り、第二次世界大戦をはさんで約20年間勤務の後、母校の教授として森林生態学の研究に携わり現在に至っている。本著は、老齢になった著者が、最後の氣力を振り絞って編集した回顧録に近い貴重なエッセイ集である。

著者は、林野庁出身の学者でありながら、戦後林野庁が日本全国で推し進めた拡大造林政策に大きな疑問符を投げかけてきた。日本は、戦後の復興需要に充当するため、自然林を大面積にわたって皆伐して、スギ、ヒノキ、カラマツの針葉樹の一斉造林を行なってきた。いわゆる拡大造林と呼ばれる政策である。

そもそも自然の森林は、同一樹種同一樹齢からなるものではなく、多様な樹種、多様な樹齢からなっているものであるが、単一の針葉樹で一斉造林すれば、災害に弱く、生物多様性に欠けた森が出る

来てしまう。人工造林するにしても、可能な限り自然の生態に近い形を指向すべきであるという。もし林野行政がもっと著者の意見に耳を傾けていたならば、今日の日本の森林形態や林業の形態は大きく変わっていたはずだと思うと残念でならない。

著者は、里山ということばの名づけ親でもあるだけあって、低地林についても一言言っている。京都近郊は暖温帯林地帯で、農業の近代化などで二次林が利用されなくなつて放置されると、やがて、常緑のシイやカシなどの暗い照葉樹林へと遷移する。自然の遷移に任せるべきであるという意見もあるが、アカマツの林や落葉樹の雑木林の方が、明るく生物多様に富んでいるから、ぜひ大切に

して残す工夫をすべきであると著者はいう。

（山川陽二）

野中至／野中千代子・著
大森久雄・編

『富士案内 芙蓉日記』



2006年1月 出版刊
平凡社 254頁
文庫判 定価 1365円

野中至は気象学の専門家ではなかったが、いち早く高層気象観測の重要性を熱烈に提唱し、私財を投じて富士山頂の測候所建設に邁進する。明治28年の秋から12月まで苛烈な条件のなかで、貧相な小屋に滞在して観測を実施する。また、野中夫人・千代子は、夫の苦勞ぶり、打ち込みぶりを見かねて、山頂に登って夫を助ける。そうした明治人の氣骨と夫婦愛あふれる手記、実録を、『富士案内』（明治34年、春陽堂発行）から自身の執筆したおもなものを収録し、千代子の『芙蓉日記』を掲載したのが本書である。

近代の「富士登山案内」としては最初のものだらう。山麓の都市と史跡案内、登山ルート解説、名産品、費用など、とても行き届い

ている。

野中自身が2回目の挑戦で成功する厳冬期初登頂記は、当時の貧弱な装備と乏しい情報のなかで、無謀と紙一重の冒険行がなまなましく伝えられている。あの当時、「寒中登山」を奨励しているのは驚きだ。「観測所設立の顛末」や「寒中滞在記」は過酷な環境のなかでの活動が詳しく報告されていて、バイオニアとしての熱意と使命感にあふれている。

千代子夫人の「芙蓉日記」は、夫妻が山頂から救出された直後に「報知新聞」に連載されたのだが、その後は目に触れることがなく、今回全文が再録された珍しいものだ。

夫の苦勞ぶりを見かねて、姑の許可を取りつけ、親のもとに乳飲み子を預けて、富士山に向かう経緯から、山頂の厳しい自然条件、苦しい生活、観測活動と無念の下山にいたるまでを冷静かつ詳細に伝えていて、慈愛と叙情に満ちている。枕草子を超える格調高い文章と和歌は、明治時代の女性の教養ぶりに驚かされるが、詳しい編集注のおかげで、あざやかな文語文も読みやすくなっている。千代

子は、もちろん冬季登頂と山頂滞在の女性第1号だ。

中村不折の挿絵は明治時代の登山風俗と沿道の景観を伝えている。

(松沢節夫)

西口正司・著

『白神物語—マタギが愛した奇跡の山々—』



2006年3月
新風舎刊 283頁
四六判 定価 1890円

白神山地は世界自然遺産に登録された壮大なブナ原生林や、美しい渓谷の広がる秘境である。

この物語は、第二次世界大戦後、日本が復興に立ち上がり、神武景気が始まるまでの、官民一体となつて「津軽に電気を」と望んでいた頃の、セミドキュメンタリーである。

行政改革で今はその名が消えてしまった陸奥岩崎村では、人々は古来の伝承や山の神を信じて海山の幸などを楽しみ、マタギは自由に熊狩りを行なつて、山の恵みに

浸っていた。

白神や岩崎村をこよなく愛した著者は、大池発電所開発の話を通じて、マタギと犬、マタギや村民と電力社員間の交流など、口承によって暖かく再現。それとともに、白神岳、向白神岳、天狗岳とか、周辺の沢、青池や岩礁の岩崎海岸、あるいはクマゲラ、イワナ、サワグルミ、マイタケに至る豊かな生態系についても、秘境の姿を明らかにし、自然保護の大切さや、今や失われつつある人々の心の輝きや、逞しい生活の必要性を訴えている。

(中村純二)

デレック・ウォーラー・著
諏訪順一・訳

『パンディット—チベット・中央アジアにおける英国測量史の側面—』



2006年4月
日本山書の会刊
A5判 528頁
頒価 3000円

ここでいうパンディットとは、十九世紀後半に、インド測量局がチベットおよび中央アジアにお

る地形測量のために派遣したインド人のことである。

当時はチベットも中央アジアもヨーロッパ人の入国を禁止していた。そのために、インド人を使つて、密かに、正式な測量器具を携行せずに調査を行なった。パンディットはいわば、秘密調査員である。単独で現地の住民たちに気づかれぬように調べるのは、大変な苦勞であった。しかし、パンディットたちがもたらした成果はすばらしいもので、それによって、チベットや中央アジアの地理の一部が明らかにされたといっている。



ATLAS TREK

個人手配旅行から人気のトレックツアーや
エクスペディションのアレンジまで。充実
度が違う「旅」のプランニングをここがけ
ています。山旅などあらゆるジャンルを取り
扱っています。お気軽にご連絡ください。



株式会社 アトラストレック
(国土交通大臣登録旅行業1167号)

東京/〒160-0008 東京都新宿区三栄町25 三栄ハウス202 TEL 03-3341-0030
大阪/〒540-0012 大阪市中央区谷町3-4-5 中央谷町ビル501号 TEL 06-6946-9111
名古屋/〒464-0807 名古屋千種区東山通り5-113 オークラビル6F TEL 052-788-2422

だろう。

パンディットについては、日本でも、メイスン『ヒマラヤ探検史の一齣』と『ヒマラヤ』が邦訳され、薬師義美『ネパールにおける初期の探検——パンディットの記録』という研究が発表されて、ヒマラヤ、チベット、中央アジアに関心のある人には、すでに知られていると思う。

著者のデレック・ウォーラーはアメリカのアジア政治学者であり、山を愛し、広くアジアを旅行している。パンディットについては多くの文献が言及しているが、詳細に論じたものがないので、この本をまとめたと述べている。そして、膨大な資料に基づいて、イギリスのインド支配の一環としての測量史の側面として、このパンディットの業績をまとめあげた。

また、ロシアとの軋轢としてのグレート・ゲームが背景として描かれている。かように詳細にパンディットの業績がまとめられたのは、この本が初めてである。インド測量局によるチベット・中央アジアの測量史というばかりでなく、中央アジア探検史の一面を明らかにしたという点でも、重要な文

献である。インドの図書館や公文書館には、かつてのインド測量局の資料が膨大に残っているが、それらを参照する作業は、かなり困難なことだったと思う。

訳書は文字通り全訳で、写真と地図はもちろんのこと、詳細な注と参照文献もすべて掲載されている。良心的な訳である。巻末には、「訳者あとがき」で、更に関係文献についてふれている。中央アジア探検史の文献として、今後長く参照されるに違いないと思う。

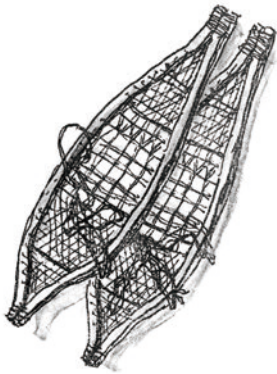
(水野勉)

*申込は☒か郵便で諏訪順一宛

(☒) j.suwa@basil.ocn.ne.jp

〒223-0051 横浜市港北区箕輪町2-1

14-19 東急ドエルアルス日吉302号)



年次晩餐会名古屋開催について

東海支部

創立101年目の本年の年次晩餐会は初の地方開催として名古屋で行なわれます。概略は以下のとおりです。詳細については逐次報告します。

日時 平成18年12月2日(土) 15時受付開始

場所 ウェスティンナゴヤキャッスル「天守の間」
改装完了されたばかりで、ライトアップされた名古屋城金のシャチを望める素晴らしい会場です。

内容 15時 展示会 中央分水嶺踏査結果報告など
16時 記念講演会

今名古屋が、東海支部が元気(仮題)
——その秘密を明かす岳豪列伝——

17時45分頃～20時30分頃 晩餐会

宿泊 当日の宿泊は名古屋城を見ながら豪華なお泊りができる晩餐会場のホテル、またはカジュアルなビジネスホテル「ルートイン東別院」を用意しております(バスでお送りします)。

記念山行 12月3日(日)

2つのコースを予定、いずれかにお申込下さい。

①猿投の森～猿投山 ②鈴鹿 御在所山
いずれの山行にも趣向を凝らしています。

申込み 10月下旬に全会員に案内状が発送されます。

23日	麗山会 つくも会	22日	00会	21日	インターネット小委員会	8日	百周年記念事業委員会	7日	総務委員会	5日	山水会	4日	資料映像委員会	2日	百年史委員会	1日	アルパインスケッチクラブ	8月	ルーム目誌
							支部促進委員会 アルパインスケッチクラブ								山岳地理クラブ				
24日	自然保護委員会 山遊会	23日	ゆきわり会	22日	JACO会	21日	図書委員会	20日	指導委員会	19日	マナスル社行会	18日	資料委員会	17日	高尾の森実行委員会	16日	アルパインスキークラブ	15日	8月来室者298名

図書受入報告 (2006年8月)

著者	書名	ページ・サイズ	出版元	刊行年	寄贈/購入別
大野剛義	団塊諸君山もいぞ——夢と勇気とサムマナー	247pp/20cm	日本経済新聞社	2006	出版社寄贈
三浦敬三	101歳の少年	189pp/20cm	実業之日本社	2005	出版社寄贈
白川義員	白川義員作品集 HIMALAYA (愛蔵版)	/36cm	小学館	1975	進藤弘氏寄贈
NPO法人 山のECHO(編)	山のデータブック (第1集)	364pp/30cm	NPO法人 山のECHO	2005	発行者寄贈
D.Zurick & J.Pacheco	Illustrated Atlas of the Himalaya	211pp/27x34cm	Univ. Press of Kentucky	2006	購入
Wprowadzenie	Wielka Encyklopedia gor I Alpinizmu (Tom I)	534pp/25cm	Stapis	2005	J.Kielkowski氏寄贈
Gory Azji	Wielka Encyklopedia gor I Alpinizmu (Tom II)	805pp/25cm	Stapis	2005	J.Kielkowski氏寄贈
Jan Kielkowski	Eastern Baltoro Mustagh	176pp/21cm	Explo	2005	著者寄贈

ゆつたりチョモランマベースキャンプ15日間 10/27～11/10
 成都～ラサ～シガツェ～チョモランマBC～カトマンズ ¥578,000



Wec 株式会社ウェック・トレック
 国土交通大臣登録旅行業1662号/日本旅行業協会正会員
 〒105-0003 東京都港区西新橋3-24-8山内ビル4階
 電話 03-3437-8848 E-MAIL info@everest.co.jp

新刊 過酷なグレート・ゲームとは!
大ヒマラヤ探検史
 薬師義美 著 インド測量局とその密偵たち



ヨーロッパ列強諸国の中央アジア進出に伴って起きた《グレート・ゲーム》。この時代を背景に、インド測量局の密偵《バンディット》を中心に描く大ヒマラヤ探検の軌跡!

A5判/384頁 定価7140円(本体6800円)

101-0052 東京都千代田区神田小川町3-24
 tel.03-3291-7811 / fax.03-3291-8448
 http://www.hakusuisha.co.jp

白水社

● さんけん通信 ●

大雨の残していったもの

山研管理人 内野慎一

バスターミナルから河童橋へ向かって歩く人々から、川沿いに出たところでまず歓声があがる。穂高が見えて「わあー！すごい」、梓川の流れを見て「きれいな水！」、夏休みは子供たちの甲高い声でいっそう賑やかだ。

ふと、7月中旬の豪雨を思い出す。山研の建物の周りを見回っていた時、裏の善六沢の奥の方から飛行機の轟音のような音が聞こえた。その音は飛行機と違って、同じ方向から長く続いていた。今にして思えば、土砂崩れの地鳴りだったのだろう。あの時、草木をなぎ倒して鉄砲水が襲ってくるような錯覚に襲われて、怖くて、足が勝手に山研の玄関に向かっていった。

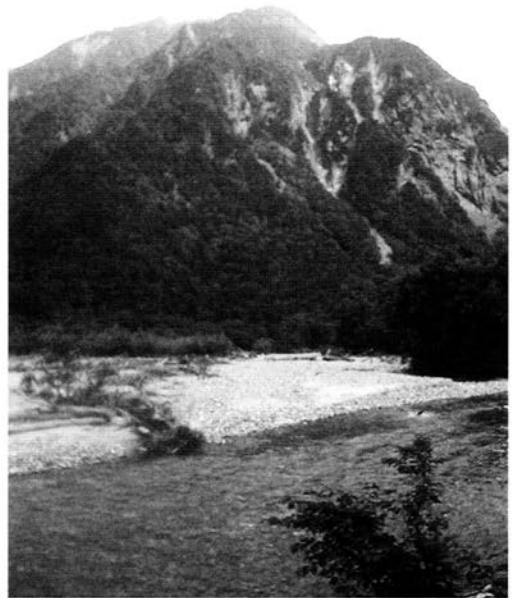
上高地には、あの大雨の残していった傷跡がいくつもある。そのことを、夏の観光客は一体どのくらい気づいていったらうか。

梓川は流れを変えた。砂丘のような河原を作り、大木をその激流で運んできた。

砂の堆積は善六沢でも顕著だ。遊歩道が沢と交わる辺りでは、笹藪が厚い砂に覆われてしまい、上の葉っぱだけがなんとか顔をのぞかせている。それは砂浜のような景色と化し、私は「善六ビーチ」と名づけた。

遊歩道は、小石交じりの固い地面だが、所々に砂っぽくて柔らかく感じる場所がある。その周りを見ると、草や笹が同じ方向に寝ていて、水が流れていたことがわかる。大雨の被害の跡である。

大雨で沢が荒れ、半月が過ぎても、水場からは一滴の水も得られなかった。雨天続きで、そこらじゅうに水があるというのにおかしな



西穂側斜面の崩落と梓川の流木（小梨平から）

話だ。大変だったが、雨水をバケツに貯めたり、雨の後だけ流れる「幻の沢」を臨時の水場にしたり、あるものでなんとか工夫するという生活も貴重な経験であった。

梅雨が明けた8月は、昨年より大勢の方々が山研を利用してくださった。水の確保に苦勞していることをご理解いただき、風呂や炊事などの節水に、快く協力していただいた。感謝申しあげたい。

あたりまえのことかもしれないが、上高地は自然のど真ん中にあるということを、今回改めて感じた。そう考えると、今回の数十年に1度という大雨も、永い自然の営みから見れば大したことではないのかもしれない。あの大雨の傷あともだんだんと周囲に溶けこんでいって、いつしか分からなくなってしまうことだろうと思う。そして、忘れられてしまうのかもしれない。

大雨を目の当たりで体験した者として、まだ傷跡が残っているうちに、ぜひ、皆さん自身の目で見ていただき、自然の驚異と力強さを感じていただきたいと思う。



インフォメーション

トーク

資料映像委員会

◆新入会員オリエンテーション開催のお知らせ
総務委員会
今後、会員として充実した活動を行なうためにも、ぜひ、ご出席下さい。詳細は、該当会員に案内書を郵送します。

日時 10月28日(土)13時より
場所 山岳会集會室

*該当会員は、会員番号が14207番以降の方となります

◆第23回図書交換会の出品図書募集
図書委員会

07年3月開催予定の図書交換会への出品図書を募集します。10月末日までに「日本山岳会・図書委員会」宛にお送りください。会員番号と電話連絡先も明記してください(図書交換会の概要は8ページに掲載)。

*問合せは、図書委員会の三好まき子まで
TEL 090-8019-86

01 hrata@hon-s.co.jp

◆名作が甦る「山岳映画とライブ

往年のクライマーであったガストン・レビュファの名作を上映。監修と日本語字幕を担当された近藤等氏のライブトークも行なう。

日時 10月3日(火)
場所 山岳会集會室

題名 「星にのぼされたザイル」
お話 近藤等名誉会員(予定)
問合せ・申込 羽田栄治まで TEL 03-3339-3975

*無料です

◆自然と人間の暮らしを考える
フォーラムIN八ヶ岳&勝沼

自然保護委員会後援

今年、20回を数えるフォーラムINは、この秋記念集會を開催。
日程 10月27日(金)~29日(日)
場所 上田市・八ヶ岳周辺・勝沼
行程 27日 新宿発
28日 A班II編笠山登山、B班II北八ヶ岳方面散策
夕刻から「フォーラムIN

勝沼」(第20回記念集會)

会食と記念コンサート

●29日 午前中ぶどう狩り

午後「フォーラムIN勝沼」

費用 約2万4千円(2泊6食、保険料他)

*バス代は別途1万2千円必要

申込・問合せ フォーラム事務局の近藤緑まで

(FAX) 03-3339-5103(26)

*申込者に詳細案内送ります

◆フモリ峰研究会への誘い

公募登山へは手が挙げにくい。そしてもうひとつ満足がゆかぬ。だが、便利なものや、制度は利用して登山実施に繋げたい。このような考えを持って7000メートル峰登山を希望している会員と研究会を開催。70歳前後の熟年会員の連絡をお願いします。

日時 10月30日(月)18時~20時

場所 山岳会集會室

内容 フモリ文献の記録検討、高所登山医学、登山戦略研究等

申込・問合せ 三渡忠臣まで (FAX) 042-625-0551

◆岩切峯泰個展

スイスを中心に10カ国の風景を、

水彩と油彩で約40点を展示。

会期 10月16日(月)~22日(日)

(11時~18時30分、最終日は17時まで)

場所 銀座 渋谷画廊

TEL 03-3571-0140

■訂正とお詫び

8月(735)号5ページ2段4行、「地下40メートル」は「地下40センチ」の誤りでした。お詫びして訂正します。

◆編集後記

●山岳会に広報委員会が生まれ、まずは在京のテレビ局や新聞社の山岳担当の記者の方たちに集まっていた。山の事故の増加や若年層の山ばなれなど、厳しい登山界にあって、山岳関連のメディアとの連携を密にしようとしたものです。詳しくは次号で。(神長幹雄)

日本山岳会会報 山 736号

2006年(平成18年)9月20日発行

発行所 社団法人日本山岳会

〒102-0081

東京都千代田区四番町5-4

サンビュウハイツ四番町

TEL 東京(03)3261-4433

FAX 東京(03)3261-4441

発行者 日本山岳会会長 平山善吉

編集人 神長幹雄

Eメール:jac-kaiho@jac.or.jp

印刷 株式会社 双陽社